

ホトトギス

昭和二十六年三月二十八日印刷
平成二十六年四月一日発行
第一七七番

ホトトギス

四月号



俳句随想 〔三百八十二〕

汀子

新しい年を迎えて新しい本を上梓した。平成二十六年一月十八日に出版する。それに先立って刷り上がったばかりの『花鳥諷詠、そして未来』を私が上京する九日にお持ち下さることになった。NHK出版が『俳句十二か月』の第二弾として世に問うものである。

いよいよ「ホトトギス」も創刊千四百号を迎えたのであるから、これからの「ホトトギス」を千五百号に向けて行くのに幸先のよい出版だと思う。しつかり内容の豊かな「ホトトギス」にするために色々考えなければならぬかと思う。誌友の皆様より様々なご意見を頂きたい。

俳句は季題を詠む詩である。季題が命であると言っても過言ではない。歳時記をよく読むことをお勧めする。同じ言葉かと思っても片方は季題で片方は季題とは言えないものもある。言葉は使われているうちに許容範囲になってしまふことがあるが、季題は正しく使いたい。「秋冷」という季題がある。「冷やか」の傍題である九月の終り頃の季題として載っている。「冷まじ」となると十月の季題でその頃に「やや寒」「うそ寒」「肌寒」「朝寒」「夜寒」「そぞろ寒」「身に入む」「露寒」がある。「冷える」は季題には入っていない。これをよく季題として使う方があるのに気がついた。

句日記 汀子

平成二十五年四月一日 ロイヤル俳壇

いささかの茶の湯心得利休の忌留守の間に咲き切る勿れ初桜寒暖のなほととのほぬ弥生かのみよし野の花の遅速は問はずとも生きて来しいくたび花の遅速問ひ

四月六日 芦屋ホトギス会

花 隴 川 に 沿 ふ 道 曲 る 道 雨も又色を極めしチューリップみよし野の花の期待は散る風情予報とは花に残酷物語

四月七日 下朝句会

風拒み風を纏ひてチューリップ暗雲に運ばれて来し春嵐風冷の朝となりたる夜半の風風に飛ぶ花屑芝を彩れる東京の花に遅れて散り初むる

四月八日 虚子忌

をさまりし風雨のなごり無き虚子忌離陸せし空に道あり虚子忌晴

四月九日 大阪倶楽部

又とんぼ返りの旅の日永かなよき旅の桜の遅速あるがまま修し来し虚子忌も過ぎてゆけるもの蝌蚪の水差し込む子の手又一人春潮の光る離陸となりにけり

四月九日 綿業倶楽部

春 暁 の 早 発 と ても 常 の 如 麗かに処して行かねばならぬことみよし野の花の消息逃さじとみらしかとややく言へる午後となる昨日より定まる日和うららかに

四月十日 工業倶楽部

もてなしは素人料理春惜む

みよし野の旅の近づく花の冷黄桜に枝垂桜に終の客出代や元気が取柄てふことも

四月十一日 清交社

みよし野の旅近づけてみし虚子忌雀の子芝をつづく外出よ今日も又虚子忌よりつづく外出よ今日も又快晴の虚子忌日和をたまはりし欠席の多き句会の春寒し

四月十三日 吉野山くつろぎの旅

落花舞ふ風のころに誘はれみよし野の落花虚空へとめどなく落伍する山路を花が又誘ふ一片の落花一直線となるわが宿の桜まさりて吉野山

第一句会

日当りてをれば桜でありしかな半分は散るも吉野の桜かな 隴夜の空 出 来 上 る 吉 野 山 稜線の消えて隴の星一つ 漆黒の闇に浮かびて夜明り

四月十四日 第三句会

みよし野の落花に山の動きけり春といふ朝の運んでくる光み吉野の朝顔に春を惜みけり祈りあり吉野は奥へ奥へ花朝の日の拾つて行きし残花かなみよなればまだまだ花の吉野山み吉野の春秋花にはじまれる

四月十四日 第四句会

道中の桜も捨てたものでなし板さんのこたはり料理花の宿なごり惜しこたはり料理花の宿

四月十六日 有恒俳句会

孝養を尽くされて春惜む日に風しなやかに柳吹かるるほどの風

蝌蚪の水覗けば次の子も覗くみ吉野の名残の花を惜みつつみ吉野の朝の花冷ただならず春灯下永久に消えざる面差しに旅疲れなどなかりしと麗かに

四月十六日 無名会

朝はまだ秘めてみし香の沈丁花雨に香を秘めてをりしや沈丁花その星吉野の香もあり沈丁花その辺に零せし旅もあり沈丁花

四月十七日 夏潮句会

み吉野の山路は暗し春の星木瓜咲いてみしこと知らぬ主かな牡丹の全き俯瞰なりしこと多数決春の暖房消すことに庭少し模様替して春惜む

四月二十日 ホトギス社吟行会

崩れてもさすがオランダチューリップ 鰯 鰯 あり し こと 春 寒 の 一 部 分 降りさうで降らぬ雲垂れ春寒し眼鏡まで合はぬ余寒のせみにして

四月二十五日 きさらぎ会

み吉野の旅遠ざかり花は葉にこも又子等の寄り道蝌蚪の水うごめきて蝌蚪の命の確かなる一斉にうごめく命蝌蚪の池尾の消えておたまじやくしと訣別す

四月二十六日 時雨会

みよし野の旅はや遠く隴かななほつづく滞在隴なる家路考へ 二 転 三 転 し て 隴

四月二十七日 句会と講演の会

浜の松高し鳥の巢を乗せて忙しき生活春愁寄せつけず春愁といふ逃道のあることを

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十五年四月四日 蕉心会

亀鳴くや道路工事をする三つ抜け
足生える今日手の生える明日の蝌蚪
動くこと忘れたら蝌蚪おしまひさ
花屑の整うてゆく流れかな
蝌蚪を追ふ作曲家の目ありにけり
花吹雪とは風任せ波まかせ

四月五日 カトリック新聞選者吟

蜷の道とは羅馬へも続けるか

四月五日 遺曆を迎えた人への祝句

花は葉に華甲の縁ありにけり

四月六日 芦屋ホトトギス会

沈丁の香に空降りて来りけり
バチカンに新たな一歩鐘朧

四月七日 野分会音屋例会

髪うらら出家したのと言はれども
汐まねき母なる海の祈りとも

四月八日 虚子忌

桜葉降る忌心の昂りに
鶯に忌日の空といふ譜面
椿落つ忌日の空を仰ぎつつ

四月九日 むさし野吟行会

大いなる忌日の余韻花は葉に
囀に座る角度を変へもして
花屑のスクラム組んでゆく淀み
蝶の屋とはひらひらときらきらと

四月十一日 土筆会

声のみを残して猫は春陰に
桃の花少女大人の目を持ちて
亀鳴くや電波散らばる東京都
亀鳴くやミサイル飛ばす飛ばさぬ
春陰や恙の君を思へば尚

四月十二日 百夜句会

花は葉に第一つ重ねつつ
亀鳴くや大東京の一詩人
恋人を追ふやうに花綴る旅
桜葉降る君癒ゆること願ひ

四月十三日 吉野くづきの旅

曲芸のやうな乗換へ山笑ふ
その中の一片蝶となり天へ
花は葉にもう来年を恋ふ心
花は葉に今晩何か出て来さう

吉野ではちよつと甘党柏餅

又訛戻る吉野の鶯よ
朝桜昨夜の靈気を払ひつつ
出し巻に朝寝心地の解かれゆく

花の句碑花の散り込む一とところ

日を浴びてより朝餉濡れ色に

春の色極めて朝餉屋餉かな

四月十五日 朝日カルチャー若草句会

鎌倉の風に触れたるより虚子忌
斜面皆董の色となる吉野
海を恋ひ浅蜷 呟く厨かな
董咲く街に少女は夢を抱く

四月十八日 登高会

春宵やワイン酌むのは君とだけ

春の宵ピルの灯一つ一つ消え

丸ピルの壁を磨いて風光る

役一つ終へ春宵を競ふ大都会

風光る高さ春宵を競ふ大都会

四月二十日 ホトトギス社吟行会

朝寝して間に合ふほどの会場へ
みよし野の余韻都心のつつじにも
都心てふ学生街に春惜む
共立女子大生たりし君うらら

四月二十三日 若水句会

羊の毛剪る六甲の風孕み
メリーさんの羊の毛剪るスミスさん
チューリップ二列縦隊回れ右
五十年波を友とし鹿尾菜刈る

四月二十四日 目黒学園句会

亀鳴くや皇居の濠といふ天地
春灯下男は涙見せぬもの
みよし野の夜は亀鳴く静寂かな
亀鳴くや今日で結婚三十年

四月二十六日 カトリック新聞選者吟

イースターエッグ作りには沸く子達
四月二十七日 ホトトギス社句会

その中にヤコブ生れしか鳥の巢
春愁を払ふボルドー十本目
鳥の巢都心に生れたる悲劇
春愁や若き恙と聞けば尚
四月二十八日 野分会東京例会
役終へて聳ゆる電波塔うらら
汐まねき恥づかしがつてゐる蟹

雑詠

廣太郎 選

水音のどこかにありて風の盆 周南 小川龍雄
 笠を取り戻る笑顔や風の盆 同 同
 押し寄せる人皆黙し風の盆 同 同
 霹靂の主宰継承菊日和 福山 竹下陶子
 天空を神の紅葉の錦散る 同 同
 虚子西へゆきし銀河に従はん 同 同
 冬椿力んで紅くなりて咲く熱 熱海 嶋田一步
 一休みして眼の高さ寒椿 同 同
 寒椿日当つてゐておとなしく 同 同
 退屈をほろほろと解く酒の粕 神戸 立村霜衣
 酒の粕溶くや湯気いきいきと濃く 同 同
 めしの字も粕汁できますも大書 同 同
 大いなる祝を果して秋惜む 長岡 安原 葉
 行くほどに包みこみ来る冬紅葉 同 同
 余裕なくなりし十一月も果て 同 同
 邯鄲に夢二の女たたずめる 相模原 木村享史
 新蕎麦をすすりて祖谷に寿 同 同
 藍の花阿波の夕日は川に落つ 同 同

雀どち遊んでくれぬ一茶の忌 樫原 稲岡 長
 時雨癖濡れて居たりし若狭道 同 同
 一枚の落葉が破る静寂かな 同 同
 懸大根景色大根だけとなる 神戸 後藤立夫
 また灯るやうに消ゆるが聖樹の灯 同 同
 毛糸帽後姿のよかりけり 同 同
 お遍路の冬あたたかきことを言ふ 熊本 岩岡中正
 懐手して見る懐手の龍馬 同 同
 寅彦の顔の長さよ冬うらら 同 同
 万の鴨のせ淡海てふ大日向 奈良 古賀しづれ
 蘆を盾鯨を盾とし鴨の陣 同 同
 一枚は鯨一枚は鴨の窓 同 同
 鷹見つけたるより空の広がりぬ 神戸 山田佳乃
 一山は枯葉を重ねゆくところ 同 同
 冬空を織り込んでゆく由比の波 同 同
 冬紅葉沈めて水の月日かな 袋井 湖東紀子
 不景気といふ賑はひも西の市 同 同
 遊ぶ子の声にありたる小春かな 同 同
 振り向けば大綿につつまれてをり 同 同
 大綿のはたとほじめて夕まぐれ 龍ヶ崎 今橋真理子
 嫁ぐ娘に十一月の過ぎ易し 同 同
 好日や十一月も旅重ね 東京 大久保白村
 放蕩が奔走勤労感謝の日 同 同
 鵝沼に石路咲き坂井建忌くる 同 同

雑詠句評(三月号より)

とほ歩・むつみ・葉

眞理子・中 正・千鶴子

保 佳・憲 明・静 龍

美 奇・廣太郎

天高し人は家てふ箱に棲み 大阪 蔦 三郎

天高し秋、十月の季題。

さて掲句、人が住まいしている処、それは家であるが、作者は「家てふ箱に棲み」と表現しておられる。

棲むには、巢・すみかの意もある。家を箱に譬えれば棲むと云う表現も頷くことが出来る。

住むにしても、棲むにしても、一転、目を天に向けると、秋月の空は澄んでいるのである。

下界の現実比べ、天空の何と高く晴れ渡っていることか……と、評してみたが？(とほ歩)

大自然の大きさと人間の小ささの対比が面白く表現されてい

る。日本、特に東京都心等の大都市圏での住宅事情が問題視されて久しいが、確かに「うさぎ小屋」なんていう表現もあつたようだが、家を「箱」と表現したのは言い得て妙である。季題の雄大な姿がより強調されている。(廣太郎)

細る月 励まして満天の星 長岡 安原 葉

月の名が育ち、十五夜になるのを俳人は心高ぶらせてどれだけ待つていたことだろう。待ちに待った仲秋の名月、何物をも寄せ付けない鮮明な月光が万物を隈なく照らす。この時ばかりは中天に君臨し、ある筈の満天の星さえも追従を許さない。その皓皓と照らす良夜を知っているだけに、月が欠けてゆく時の姿と光を得てきた星の関係を確と目に止めた作者。満天の星が「細る月」を「励まして」と感じさせた作者の情感の深さに感動している。こういう月と星の詠み方に初めて接し、作者の宇宙、自然への優しいまなざしに感動を貰った。(むつみ)

当然の事ではあるが、満月が過ぎると、今度は月はだんだん細くなつて行く。そして、それにもなつて月光も暗くなつて、その分今度は夜空に見える星も増えてくるだろう。そんな月の満ち欠けを通して、空の壮大なドラマが語られている。何かギリシャ神話にでも引き込まれたようだ。(廣太郎)

天地有情

金子選

冬紅葉生死さまよひぬし手術
 大病をたたかひぬきし菊枕
 まどろめる床擦れの妻冬あたたか
 人柄が朝の切干料理にも
 橋涼し宇宙と対話する如く
 スコールに車窓塗り替へられてをり
 皇后のお歌より翔ち冬の蝶
 温泉浴みより冬の月光浴みしこと
 赤も黄も枯葉の道となつてゆく
 よく晴れて十一月もゆかんとす
 邯鄲に立ち逢瀬のごとく待つ
 芒野を出てシベリアへ向ふ風
 鷹の眼の中にありたる山河かな
 古手紙次々焼べし煖炉かな
 時雨虹見て発ちし旅快晴に
 時雨虹日本海は沖暗め
 はや二十日十一月と思ふ間に
 夫の忌や十一月は嫌ひなり

福山 竹下陶子
 同 同
 仙台 赤川誓城
 同 同
 東京 稲畑廣太郎
 同 同
 同 河野美奇
 同 同
 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同 同
 相模原 木村享史
 同 同
 同 同
 袋井 湖東紀子
 同 同
 同 同
 長岡 安原 葉
 同 同
 東京 今井千鶴子
 同 同

連山を近寄せてゐる冬日和
 富士筑波つなぐ青空冬一と日
 新幹線降りて東京駅師走
 通院のタクシーにゐて街師走
 大いなる枯木となりてわが前に
 大いなる枯木となりて今はあり
 秋深し身ほとりといふことば好き
 鴉鳴くやホームに立てばみな旅人
 喧々と諤々と落葉の談議
 破れても裂けても暄と朴落葉
 白鳥の水の碧さに着水す
 顔見世の今年かなしきまねきかな
 ひんやりと月の光も冬となる
 晴れ切つて枯れ切つて野の風となる
 ためいきのやうにみんな蟬終はる
 法師蟬ひとつしづかな墓所
 山茶花のどこ欠けしともなき盛り
 妣在らばおでんの味に何足さむ

同 橋本くに彦
 同 同
 熱海 嶋田一步
 同 同
 群馬 中杉隆世
 同 同
 熊本 岩岡中正
 同 同
 神戸 後藤比奈夫
 同 同
 同 同
 樫原 稲岡 長
 同 同
 東京 岩村恵子
 同 同
 同 同
 同 今井肖子
 同 同
 神戸 三村純也
 同 同

落日

稲畑汀子

一年の後半はスケジュールがぎっしり予定されており、ホトトギス千四百号の祝賀会もその中に組み込まれている。その日も無事に済んで、ほっとする間もなく国民文化祭のために山梨県笛吹市へ行く予定になっていた。私は列車を乗り継いで行くよりも車で行った方がいいのではと思い、その旨、係の人に伝えていた。路は高速道路で行けるのであるが、ともかく五百キロを超えると、いう速さである。運転の手替わりを吉田先生にお願いしていた。「一人でも大丈夫とは思うけど、帰りは稲岡先生にも乗って頂くことになっているのでお願いします」

前日、日帰りで上京して朝日俳壇の選考会に出席した。選者が揃ったところで国民文化祭の話になった。

「笛吹市って御存知？明日芦屋から行くのだけけれど」

「ああ、知ってる」

間髪入れず金子さんが答えた。

「今年の国民文化祭はそこであるのよ。吟行地の中に飯田蛇笏のお宅も入っているらしいわ」

「そうだそうだ蛇笏や龍太の家がある。どうやって、そこへ行くんだ。東京からだと一時間余りですよ」

「私ね芦屋から車で行くのよ」

「馬鹿だなあ。よせよせ。あぶないあぶない」

「大丈夫よ。少し遠いけれど。でももう明日なのに変更は出来ませんよ」

「やめとけ、やめとけ」

「そんな、簡単に言わないでよ。手替わりをして頂く人にも乗って頂くから大丈夫」

日帰りと言うことで仕事を終わるとそそくさと立ち上がった。

「やめとけよー」

まだ金子さんが叫んでいた。

「ありがとうございます」

その夜は、四時半に目覚ましをかけて早々と休んだ。

早朝六時に出発である。名神と中央自動車道乗り継ぎ、何度か休憩しながら諏訪湖サーブエリアで運転を交代した。アルプスの山々かと思える山々が聳え立っているのであろが駒ヶ岳だけは分った。何となく山に霧がかかっている。幻想的な景色が続いた。甲府という字が見えてくると、目的地も近い。笛吹市の街に入るとメーンロードなのか車が渋滞していたが、ナビゲーターは間違いない。笛吹市のホテルへ案内してくれた。

笛吹市はさすがに遠かった。我が家に無事に帰り着いたのでほっとした後、体調を調えることに専念した。すぐに元気が戻って来た。

「中国俳句大会へはお車で行かれますか？それとも新幹線で行らっしゃいますか」

岡山の黒杭さんから電話を頂いた。

「新幹線でお伺い致します」

「新神戸からなら三十分ほどで着く筈ですよ。お迎えに行きますので十二時に出発のバスに乗って下さい」

「ありがとうございます」

瀬戸大橋の橋脚の与島への吟行の後、鷺羽山のホテルでの同人会、そして宿泊。ホテルの庭に出てもいいと言われ、瀬戸大橋、瀬戸内海を俯瞰する景色、瀬戸の海を赤く染めた落日に出会う事となった。真赤な日が沈んで暮れ始めた。はっと振り返って東の空を仰ぐと大きな丸い月が昇っているの気がついた。

